

豊かな資源を活かした 北海道モデルの構築



後藤 健市 (ごとう けんいち)

場所文化クリエイター (地域活性化伝道師)

1959年帯広市生まれ。高校卒業後、札幌、東京を経て米国に留学。その後、ベンチャー企業(東京)にチーフディレクターとして参加し、国内家電メーカーの草創期のワープロやパソコンのセールスプロモーションを担当。86年に帯広に戻り、社会福祉事業に携わりながら、同時に地域づくりに取り組み、北の屋台、スノーフィールドカフェ、場所文化フォーラムなどの立上げや運営、食をテーマに地域活性化に取り組む会社設立に関わり、場所の価値を生かした地域づくりの企画・提案、実践を行っている。

睦^{むつき}月、如^{きさらぎ}月、弥^{きつき}生、卯^{みなづき}月、皐^{ふみづき}月、水^{なかつき}無^{かん}月、文^{なづき}月、葉^{しわす}月、長^{ながつき}月、神^{かな}無^{なづき}月、霜^{しも}月、師^し走。これらの月の呼び名を改めて見ると、それぞれに自然と融合して暮らす豊かさを再認識することができる。これらの名称の中で、子供から大人まで知られているのが師走。

師走という言葉の語源は諸説あるが、最も一般的なのは、年末は誰もが忙しく僧侶(師匠)までもが走り回るからというもの。しかし、今は、師も含めすべての人が、1年中が師走の慌ただしさの中にある。

特別でなくなった正月

年中忙しいことと直接関係ないが、「便利」であることが何事にも優先され、モノ消費への欲求を制御できない今の流れの中で、大晦^{おおみそ}日や正月の過ごし方も変化し、同時に、各地域の伝統的な風習が失われてきている。年越しそば、初詣、鏡餅、お節料理、雑煮などは形としては今も残っているが、本来の意味を知る人はますます少なくなってきている。

昔は、正月三が日は、地域にとって、また家族にとって共通の特別なハレの日であり、スーパーもデパートもお休みだった。しかし、今は元旦から営業する店が増え、さらに、年中無休24時間営業のコンビニがあることも、正月の特別さを薄めている要因だろう。

お節料理に込められたもの

そんな中でも、正月のハレを感じさせてくれるのが、お節料理。季節の変わり目の節句に出すハレの料理のことだが、正月のお節料理はその代表といえる。

そのお節も、自分で作る家庭がめっきり減り、スーパーや料理店などのチラシには、さまざまなお節料理が並ぶ。お金さえ出せば豪華なお節料理が買えるし、家庭では出せない味を楽しめる。しかし、お節料理には、それぞれの地方や家庭で、親から子へ、人から人へ伝えていくべき大切なコトが込められている。それは形やモノではなく、固有の風土の中で生み出され、育まれてきた場所の文化であり、技術、さらには、自然や地域への感謝や家族の幸せを願う心。豊作を願う「ごまめの田作り^{*}」、子孫繁栄を願う「数の子」、魔

※ ごまめの田作り

ごまめ(鱒、五万米、古女)と呼ばれるカタクチイワシの素干しを調理した料理。肥料としてイワシが使われていたことから豊作を願って食べられた。

よけのための「黒豆」など、正月恒例の食事のいわれを子供のころ父に教わったが、これらの料理を食べながら、日本が大切にしてきた心の存在に無意識に触れてきたのだと思う。まめに働く（黒豆）、よろこぶ（昆布巻き）というダジャレ的な語呂合わせにはつい笑ってしまったが、逆に、遠い昔の人が身近な存在に感じられた。

21世紀の資源とは

前置きが長くなったが、節句のような季節と関係の深い行事の中に、21世紀の真に豊かな社会を構築する重要なカギが眠っているように思う。

「資源のない日本は知恵で稼がなければならない」と小学校の授業で教わった。鉄鋼などの鉱物資源、石油などのエネルギー資源を海外から輸入し、知恵と技術を駆使し、質の高いモノを作り続け、日本は世界に冠たる経済大国になった。しかし、有限な地球資源の無節操な利用によってもたらされた地球生命の危機が語られる今、人々の意識は急速に変化し、生活の質を自分たちが過ごす時間に求めるようになってきている。

要するに、21世紀の世界が求める資源は、豊かな自然環境であり、メリハリのある季節（四季）であり、安全な水と、その水と太陽の光によって育まれた農作物や、海や川で捕れる魚介類である。だとしたら、日本はもはや資源のない国ではなく、世界的に見ても、豊富な資源に恵まれた国だといえるのではないか。

その豊かな資源である「日本の自然」は、地球的にみても奇跡といえる“稀な”気象環境と、その気候によってもたらされた自然（海、山、川、平野）のバランスによって生み出された地球からの贈り物である。

先進国のエゴがもたらす都市化

国連の資料によると、先進国の都市人口はすでに全体の7割を超えている。世界全体でみるとまだ5割に

満たないが、都市への人口移動はますます加速していかうだろう。それには2つの理由がある。1番目は、先進国が今もなお「都市こそが豊かさの象徴」という幻想から抜け出られていないこと。2番目は、先進国がマネーによる自国の豊かさ維持のために発展途上国の経済発展を利用していること。要するに、先進国のエゴこそが、過去も、今も、そして未来においても、人類そのもの、地球を危機にさらしているといえる。

真に豊かな北海道モデルの構築

地球の豊かな自然環境がすべての生命の源であり、そのもとで人類が生み出した農林水産業が展開されているからこそ、マネーに依存した都市での便利な生活や、マネーそのものによる経済ゲームが成り立っているということを今一度認識しなければならない。そして、都市こそが豊かさの象徴だという20世紀の考え方を見直し、人口減少と高齢化により限界集落というらく印を押されている地方にこそ残されている豊かな自然環境資源と、人口集中する都市の便利さを融合させた21世紀型の新たな地域モデルを構築し、それを世界に発信することが日本の役割ではないのか。

ちなみに、農林水産資源が豊富にあり、さらに、異なるレベルの規模と機能を持った都市を複数有する北海道はこのモデル構築に最適な場所である。その実現には道州制の展開も含め、国と道に加え、各市町村が一丸となることが不可欠であり、さらに、お金の質、地域における貨幣経済の仕組みの変革が同時に必要になる。したがって、この実現には越えなければならないハードルがいくつも存在するが、農村と都市のバランスのとれたサステイナブルな地域形成なくして、私たちの未来は築けないのだから、北海道の可能性を信じ、北海道が先頭に立ち一日も早くそのモデルづくりに着手すべきである。

